

FLORA KANAGAWA

Mar. 3. 2009 No.68

神奈川県植物誌調査会ニュース第 68 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



左：オオキンミズヒキ（熱海市岩戸山 2006 年 9 月 4 日 勝山輝男 撮影）。本文 828 頁参照；右：アシタカマツムシソウ（熱海市岩戸山 2008 年 9 月 8 日 田中徳久 撮影）本文 831 頁参照。

目次

支倉千賀子：箱根町仙石原周辺のキンミズヒキ属の植物について.....	828
田中京子：ヤナギバルイラソウについて.....	828
野津信子ほか：最近確認された横浜市内産植物.....	829
古宮邦雄：最近みつけた 3 種.....	830
秋山幸也・宮崎卓：ある日の津久井地域植物調査から.....	830
勝山輝男・田中徳久：県内のマツムシソウ.....	831
勝山輝男：タンザワサカネランが記載された.....	832
浜口哲一：マツバウンランの越冬葉.....	832
長岡 恂：諏訪哲夫先生ご逝去.....	833
事務局：松下幸之助花の万博記念奨励賞受賞.....	834
事務局より.....	834
編集後記.....	834

箱根町仙石原周辺のキンミズヒキ属の植物について

(支倉千賀子)

箱根仙石原や台ヶ岳の北斜面など、箱根周辺のススキ草原に点々と生育するキンミズヒキは、葉の裏面の腺点がやや不明瞭で、托葉が半円形をしていて多くの鋸歯を持つものがあり、これはキンミズヒキとは異なるものではないかと、これまで多くの方が調査や観察の際に同定に苦労してきた一群がある。

『神植誌 01』でも堀内洋氏が、仙石原産の標本(箱根仙石原 1988.10.10 浜中義治 KPM-NA1101921)を引用し、「草姿がチョウセンキンミズヒキ的であるが、雄しべは 12 本前後で、果実の萼筒の縦肋、毛、腺点の様子がキンミズヒキ的であり、葉裏の腺点はチョウセンキンミズヒキ的な目立たない小さなものが多いが、やや大きく目立つキンミズヒキ的なものも少しまじる等、キンミズヒキとの中間的な形質を有し、あるいは雑種かもしれない。とりあえずチョウセンキンミズヒキに含めておこうが、ここに記して問題提起としたい。今後の検討課題である。」と書いておられる。このため、箱根周辺のこの型のキンミズヒキの仲間は生命の星・地球博物館ではチョウセンキンミズヒキとして収蔵されてきた。

昨年(2008年)、芹沢俊介氏によって日本産キンミズヒキ属の *Agrimonia noguchii* Seriz. オオキンミズヒキ (Shidekobusi, Vol.No.1, 2008) が新種として記載されたが、その特徴が箱根仙石原産の問題のキンミズヒキの仲間と類似しているため、生命の星・地球博物館所蔵の神奈川県産のチョウセンキンミズヒキとされる標本を検討した。その結果、茎にそろって開出する黄褐色の密長毛があること、開花している個体の茎の中部以上の葉でも頂小葉が広い楕円形で鋸歯も丸みを帯びていること、托葉が大きな半円形で鋸歯が多いことなどから、前述の KPM-NA1101921 の標本も含め、箱根仙石原や湯河原で採集された 8 点の標本がオオキンミズヒキと同定すべきものであることが分かった。ただし、箱根周辺のオオキンミズヒキは、芹沢氏が指摘するオオキンミズヒキの特徴である「茎が太くキンミズヒキの短毛型よりも強壯である」という印象は薄く、チョウセンキンミズヒキのようにやや茎は細く繊細である。

なお、オオキンミズヒキとチョウセンキンミズヒキは葉の裏面の腺点がやや不明瞭であることや托葉がどちらも大きく半円形であることでは似ているが、オオキンミズヒキでは花序軸の下部で花がまばらでも

上部にいくにつれ非常に密につき、茎の中部の葉では大きな小葉が 5～7 枚ついて、葉の裏面の脈上だけに長毛が多い(これらの点ではキンミズヒキに類似)のに対し、チョウセンキンミズヒキでは花は花序軸の下部でまばらであるが上部でもさほど密につかず、茎の中部の葉では大きな小葉が 3 枚であることが多く、葉の裏面に脈上の長毛のほかにも全体に伏した長軟毛が多いことなどで明確に区別できる。今回の検討では、生命の星・地球博物館所蔵の箱根周辺のチョウセンキンミズヒキとされていた標本すべてがオオキンミズヒキであったが、津久井郡相模湖町(現在は相模原市相模湖町)で採集された標本(相模湖町陣場山 1988.8.17 菱山忠三郎 KPM-NA0106298)はチョウセンキンミズヒキそのものであった。

本報告にあたって、栃木県の野口達也氏には、現在一般には入手できない雑誌シデコブシの一部をコピーしていただき、箱根周辺でこれまで同定に苦労していたキンミズヒキの仲間の標本 1 点をお送りし、オオキンミズヒキであることを確認いただいた。ここに深く感謝いたします。なお、オオキンミズヒキと同定された生命の星・地球博物館所蔵の標本は以下の通りである。

標本：箱根町仙石原 吉川アサ子 1980.9.7 KPM-NA1043663; 箱根町仙石原 小崎昭則 1989.8.7 KPM-NA1101920; 箱根町仙石原 城川四郎 1989.9.7 KPM-NA1102264; 箱根町仙石原 勝山輝男 1998.9.12 KPM-NA0112004; 箱根町駒ヶ岳 勝山輝男 1991.9.11 KPM-NA1104094; 箱根町箱根町三国山 佐々木あや子 2001.8.29 KPM-NA0122950; 湯河原町千歳川源流 勝山輝男 1998.8.17 KPM-NA0109319.

ヤナギバルイラソウについて

(田中京子)

2002年4月から、大岡川ファンクラブの活動拠点である河床プロムナード(南区弘明寺・前田公園前)で、花暦を作成するための調査をしていた際、見慣れぬ植物が生育していたので開花するのを見守った。

花は8月上旬頃から咲き始め、10月中旬頃まで咲き続けた。茎の高さは約50cm、葉は対生し、長さ14～17cm、幅は中央部が約1cmの広線形で、先は次第に細くなり、ヤナギの葉に似ている。花は

上部の葉腋から長い花梗を出して数個がつき、径5cmほどの淡紫色のろう斗形で、先は5裂する1日花であった。同じものが川沿いの民家にあり、そこからの逸出と思われた。林辰雄氏に同定を依頼したところ、メキシコ原産の多年草のキツネノマゴ科のヤナギバルイラソウ *Ruellia brittoniana* Leonard で、日本では沖繩に帰化していると教えていただいた。

2008年9月20日、同所を再訪したところ3~4倍に増えており、定着したと思われるので標本を作成し、横浜市こども植物園に収めた。林先生に現状を報告したところ、FLORA KANAGAWA への投稿を勧められ、丈夫な植物と思われ、今後各地に広がるのではなかろうかと思ひ、簡単であるがここに報告させていただいた。

標本：横浜市南区弘明寺 田中京子 2003.8.11
YCB427539.

最近確認された横浜市内産植物

(野津信子・佐々木シゲ子・
和田良子・埜村恵美子)

前報(野津ほか, 2007)以後、2009年2月までに横浜市戸塚区・栄区・泉区で採集し、標本を作成した横浜市内産の新産植物を報告する。

新産種は『神植誌01』の分布図より判断し、レッドデータ植物については勝山ほか(2006)のカテゴリーを示した。

オオバノハチジョウシダ *Pteris excelsa* Gaudich.

栄区のものはいたち川上流の土手に1株あるもので、生育状態は良好である。舞岡町のもは舞岡公園の水路の岩に1株が着生しているものである。県内では相模川より西側での生育は珍しくないが、横浜市内での記録としては1980年の緑区での記録(横浜市緑区新治町 勝山輝男 1980.12.7 KPM-NA1051750)以来のものである。

標本：栄区上郷町 佐々木シゲ子ほか 2007.12.4
KPM-NA0159500; 戸塚区舞岡町 佐々木シゲ子 2008.10.12 KPM-NA0161875.

コタニワタリ *Asplenium scolopendrium* L. [県：絶滅危惧 I A 類]

舞岡公園の岩上に胞子をつけた1株が生育していた。採集年月日が古いが前回までの報告からもれていた。

標本：戸塚区舞岡町 佐々木シゲ子 2003.10.31
KPM-NA0151381.



オオバノハチジョウシダ (横浜市栄区上郷町 2009年2月16日 佐々木シゲ子撮影)。

キダチコマツナギ (チュウゴクコマツナギ)

Indigofera aff. *pseudo-tinctoria* Matsum.

高橋(2005)により紹介されており、木村(2007)により千葉県からも報告されている。高橋(2005)や木村(2007)はキダチコマツナギの和名を用いているが、生命の星・地球博物館の田中徳久学芸員によると、博物館の収蔵資料管理システムでは、仮にチュウゴクコマツナギの和名と上記学名により管理しているが、勝山(2003)ほかも指摘しているように、ヨモギ類やハギ類などとともに、外国産の日本と同種とされるいわゆる“郷土種”による緑化が問題になっており、収蔵庫の標本管理上も、その同定や学名の扱いなども含め、多少混乱している。

標本：泉区下飯田町境川遊水地公園 野津信子
ほか 2008.12.2 KPM-NA0161870.

チャボタイゲキ *Euphorbia peplus* L.

『神植誌01』によると川崎市のみでの記録がある。

標本：泉区下飯田町 県立境川遊水地公園越流堤
野津信子ほか 2008.12.02 KPM-NA0161869,

なお、泉区下飯田町の神奈川県立境川遊水地公園では2008年7月から月1回、定期的に調査・観察を続けており、今後、花ごよみについても、記録をまとめる予定である。

引用文献

神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1580pp. 神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.

勝山輝男, 2003. 緑化と帰化植物. 侵略とかく乱のはてに一移入生物問題を考える一. pp.60-63. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 雑管束植物. 高桑正敏・

勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp.37-130. 神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.

木村陽子, 2007. キダチコマツナギ (大型コマツナギ) 流山市で記録. 千葉県植物誌資料, (22): 194-195. 千葉県植物誌調査会, 千葉.
野津信子・和田良子・佐々木シゲ子・埜村恵美子, 2007. 横浜市都筑区と戸塚区の横浜市新産種およびレッドデータ植物. Flora Kanagawa, (65): 803-804.
高橋秀男. 2005. 植物観察ノート [33] 大木になるコマツナギ. 横浜植物会会報, 36(1): no pagination. 横浜植物会, 横浜.

最近みつけた 3 種

(古宮邦雄)

ヤマブキシソウ *Chelidonium japonicum* Thunb.

大磯町生沢から林道を登ってまもなく、2 株が黄色の花をつけていた。ヤマブキシソウは、『神植誌 01』によると、小仏山地や相模原台地に見られるとされ、『神奈川 RDB2006』では減少種とされている。最近体調を悪くしていたため、調査していなかったが、偶然通りかかって発見した。杉林下の環境が悪い所で良く生き残れたと思う。

ワニグチソウ *Polygonatum involucreatum* (Franch. & Sav.) Maxim.

2008 年 4 月 23 日、オートバイで、中井町の民家から近い所で山の中に入った。まだ花は咲いていなかったが、近づいてみると見たことのない植物と感じた。5 月 23 日、再度訪れてみると、苞が花序に覆い被さって 2 個が咲いていた。ワニグチソウで 10 株が咲いていた。ワニグチソウは『神植誌 01』では、横浜周辺に多く、大山付近と小仏山地に記録がある。このあたりにあるとは予想もせず、驚いた。丹念に根気よく調査すれば、未発見の植物があることが分かった。

ナンバンハコベ *Cucubalus baccifer* L. var. *japonicus* Miq.

2008 年 10 月 5 日、散策路を歩いていたら、見慣れぬ花が黒い実と一緒に見られ、よく観察するとナンバンハコベであった。ナンバンハコベは『神植誌 01』では「山地の草原や林縁に生える」と記されていたが、(神奈川県西部の平塚市の山地にあるが) こんな家の近くにあるとは予

想外であった。その後、観察会のメンバーにも連絡し、感動を与えた。

なお、それぞれの標本は平塚市博物館に収める。

ある日の津久井地域植物調査から

(秋山幸也・宮崎卓)

相模原市立博物館が進める津久井地域総合調査も 3 年目のシーズンを迎えました。相模原植物調査会会員を中心とした調査メンバーもすっかり津久井通になり、城山、津久井、相模湖、藤野を自分の庭のように歩き回っております。これまでもシノブカグマ (菅沼, 2007)、オキナグサ (秋山, 2007)、キセワタとアキノハハコグサ (秋山, 2008)、トウゴクシソバツツナミ (久江, 2008) など、注目される確認種を本誌にご報告してきました。これ以外にも、稀産種、県内新産種などを多数確認しており、途中経過の詳細は相模原市立博物館研究報告にて公表しました(宮崎・秋山, 2008)。今回はその最新情報として、真冬のある調査の折に見つけた 2 種のシダの発見の様子をお伝えします。

コバノカナワラビ *Arachniodes sporadosora* (Kunze) Nakaike

2009 年 1 月 28 日。この日の行程は、相模原市津久井町串川から堂所山^{どうどころやま}へ登り、雲居寺^{うんこうじ}へ下りるコースです。雲居寺周辺の谷間は昨年、有志を募って調査しており、このときはシダの豊富な谷という印象を受けていました。この日も、参加した 8 人はシダのありそうな谷に入ると、湿度の高さをかき取る特殊な感覚器官である“シダ官”を駆使して道無き道を進みます。

先頭に行くのは、地元相模湖町の三樹和博さんです。カモシカのような軽快なフットワークと独特の嗅覚で、いつもとんでもない植物を探し当ててくれます。この日も、イノデの森で油を売るほかのメンバーを尻目に、沢をずんずん 1 人で進みます。「三樹さんはどこまで行ったんだろう？」と気になり始めた矢先、いつものように“おみやげ”を手に戻って来ました。そのおみやげこそが、コバノカナワラビ。昨年の調査で、前を素通りしていた場所からの発見でした。三樹さんの眼力には、いつもながら驚かされます。

コバノカナワラビは、関東地方以西、四国、九州、琉球、東南アジア、ニューギニアなどに分布

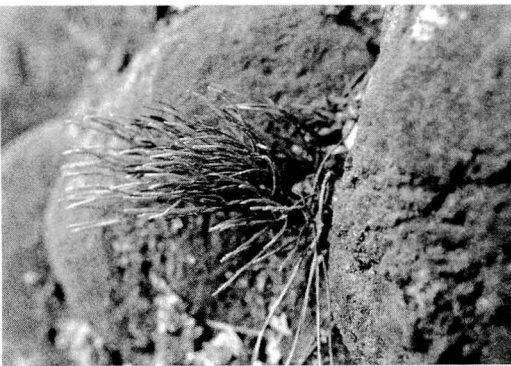
する南方系のシダです。県内では箱根、大磯丘陵、三浦半島などの沿岸部の山地で見られますが、相模川右岸側の内陸部では初めての確認となります。また本種は、雑種を作りやすいシダでもあります。今後、津久井地域からオオカナワラビとの雑種テンリュウカナワラビ、オニカナワラビとの雑種オニコバカナワラビが出現する可能性が出てきました。

標本：相模原市津久井町根小屋 宮崎卓
2009.1.28 SCM38789.

マツバラン *Psilotum nudum* (L.) P.Beauv.

コバノカナワラビの余韻に浸りながら雲居寺に下り、県道に出ます。すでに「お疲れ様モード」の惰性走行で、おしゃべりをしながら歩いている時、とある小さな神社の脇に差し掛かりました。それほど古めかしくもない石垣から、ツンツンと伸びる小さな植物が。「あれ、これなんだろう？」と何気なくそれを手のひらでポンポンとなでたのは、川崎香代さん。動植物全般に及ぶ鋭い嗅覚と探索眼の持ち主です。無造作に「頭」をなでられたその植物も驚いたかもしれませんが、見ていた宮崎も、思わず「マツバランじゃないですか！」と声を上げました。マツバランと言えば、『神植誌 01』各論の冒頭を飾る原始的形態の植物です。行き交う車や下校中の小学生の視線を感じつつ、石垣にへばりついてこの奇妙な植物を観察しました。

結局、30mほどの石垣の中で、数株がかたまっで見られるのみでした。園芸用の苗木に随伴してきたものが逸出することがあるそうですが、あからさまにそういう由来が疑われる場所でもありません。かと言って、付近に本種が着生するような古木があるわけでもなく、自生かどうかの判断はつきませんでした。



マツバラン (相模原市津久井町 2009年1月28日 秋山幸也 撮影)。

いずれにしても、意図して植えるような場所でない所に、「絶滅危惧Ⅱ類 (勝山ほか, 2006) のマツバランがあった」という事実のみを報告いたします。

標本：相模原市津久井町根小屋 宮崎卓
2009.1.28 SCM38790.

津久井地域調査は今後も継続していきます。懐深く、歩いていない場所、行っていない季節などまだまだ課題はたくさん残っているので、焦らずじっくり調査に取り組んでいきたいと考えています。

引用文献

- 秋山幸也, 2007. 県北部のオキナグサの生育状況について. *Flora Kanagawa*, (65): 805.
- 秋山幸也, 2008. 相模湖町のキセワタとアキノハハコグサ. *Flora Kanagawa*, (66): 816-817.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1580pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男・田中徳久・木場英久, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 菅沼広美, 2007. 相模原市津久井町でシノブカグマを確認. *Flora Kanagawa*, (65): 804-805.
- 久江信雄, 2008. 丹沢三峰にトウゴクシソバツナミ. *Flora Kanagawa*, (67): 820.
- 宮崎卓・秋山幸也, 2008. 相模原市津久井地域の植物相 (第1報). 相模原市立博物館研究報告, (17): 93-122.

県内のマツムシソウ

(勝山輝男・田中徳久)

『神植誌 01』では、神奈川県には、マツムシソウ *Scabiosa japonica* Miq. (広義) として、丹沢や箱根の山地にマツムシソウ form. *japonica* (狭義) が、三浦半島の海岸上の草地に、関東の海岸に分布する高さ 10 ~ 25 cm で葉が厚いソナレマツムシソウ form. *littoralis* Nakai が分布するとされている。このうち、ソナレマツムシソウは、これまでは海岸型の品種 form. *littoralis* Nakai として扱われることが多かったが、大場 (2003) が *S. japonica* Miq. var. *littoralis* (Nakai) T.Ohba comb.nov. として変種名を提唱し、Konta & Matsumoto (2006) も、その分布が房総半島〜

伊豆半島に限られることから、単なる海岸型ではなく、変種 var. *littoralis* (Nakai) Ohba ex Konta & S. Matsumoto としている。その後、須山 (2007) は、海岸から離れた内陸の山中にもソナレマツムシソウと同じ形態的な特徴を持つものがあることを報告し、須山ほか (2008) は、杉本 (1965) が愛鷹山を基準産地として記載したアシタカマツムシソウ var. *lasiophylla* Sugim. がソナレマツムシソウと同じものであることを指摘している。

以上によると、神奈川県内には、マツムシソウ *Scabiosa japonica* Miq. var. *japonica* とアシタカマツムシソウ var. *lasiophylla* Sugim. が分布することになり、それぞれの特徴を須山 (2007) などを参考に示すと次のようになる。

マツムシソウ：葉は草質～やや革質で裂片は鈍頭。花茎は地上高の半分以下。根出葉は花期にないことが多い。

アシタカマツムシソウ：葉は革質で光沢があり、裂片は丸く切れ込む。茎は短く数 cm ～地上高の半分以下で、花茎は地上高の半分以上。花期に根出葉が多く残る。

これに従い生命の星・地球博物館の所蔵標本を再確認した結果、一部に、標本の状態がよくなく(希少種として茎頂部のみを採集したものなど)、同定が困難なものもあるが、下のような分布図が得られた。なお、『神植誌 01』で、大森 (2001) は、ソナレマツムシソウに類似した形態をもつものが、北海道や東北の海岸にもあることを述べている。

引用文献

Konta, F. and S. Matsumoto, 2006. New or interesting Angiosperms from Suzaki, Shimoda city, central Japan. *Bull. Natn. Sci.*



生命の星・地球博物館の所蔵標本によるマツムシソウとアシタカマツムシソウの分布図。

Mus., Tokyo, Ser. B, 32: 35-45.

大場達之, 2003. マツムシソウ科. 千葉県の自然誌. 別編 4. 千葉県植物誌. pp.559-560. 千葉日報社, 千葉.

大森雄治, 2001. マツムシソウ科. 神奈川県植物誌 2001. pp.1304-1305. 神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.

杉本順一, 1965. 日本草本植物総検索誌 双子葉篇. 832pp. 六月社, 大阪.

須山知香, 2007. 2006 年度植物地理・分類学会奨励賞受賞論文: 東アジア産マツムシソウ属(マツムシソウ科)の系統分類学的研究. 植物地理・分類研究, 54: 105-126.

須山知香・杉野孝雄・植田邦彦, 2008. アシタカマツムシソウ(マツムシソウ科)のレクタイプ選定とソナレマツムシソウ. 植物研究雑誌, 83: 246-252.

タンザワサカネランが記載された

(勝山輝男)

FLORA KANAGAWA 64 号 (2007) で報告したタンザワサカネランが新種 *Neottia inagakii* Yagame, Katsuy. & T. Yukawa として、日本植物分類学会の英文誌 *Acta Phytotax. Geobot.*, 59(3): 219-222 (2008) で正式に記載された。記載は長野県高森町ラン園の谷亀氏、国立科学博物館の遊川氏と私の 3 名が共著で行った。種小名は本種に最初に気づかれた伊勢原市の稲垣精秋氏への献名である。FLORA KANAGAWA に報告した後も新たな産地は見つからず、丹沢三ツ峰、玄倉川、尊仏の土平、織戸峠の 3 ヶ所の記録のみで、今のところ丹沢の固有種(当然であるが神奈川県の固有種)である。サガミジョウロウホトギスとスルガジョウロウホトギスを変種関係とすると、種としては本種が唯一の丹沢(神奈川県)固有種となる。

マツバウンランの越冬葉

(浜口哲一)

開花期以外の植物の姿というのは意外に観察していないもので、写真のロゼットに気づいた時も、すぐには種類が分からなかった。同じものが周辺にたくさんあったので、そのあたりに春夏に生え

ていた植物を思い浮かべ、ようやくマツバウンランという答えにたどり着いたのだった。針金のように細い茎を四方に伸ばし、長さ3～4mmの米粒のような葉が三輪生ないし四輪生している。湘南ブロックの観察会で紹介したところ、ベテランの方からも即答が出なかったの、あまり知られていないと考え、紹介してみることにした次第である。なお、この種的生活型について、『神奈川県植物誌 2001』には記載がないが、『日本の帰化植物』（清水建美編、2003）には越年草とある。



学構内 2008 年 12 月 1 日 浜口哲一 撮影).

諏訪哲夫先生ご逝去

(長岡 恂)

厚木植物会会長、諏訪哲夫氏が 2009 年 1 月 29 日に亡くなられた。享年 77 歳。1931 年厚木市生まれ、横浜国立大学生物学専攻卒。県立高校生物科教諭、県立瀬谷西高校長を歴任。その後、厚木市郷土資料館嘱託として同館植物標本庫とデータベースを整備し、同館に植物標本約 6,000 点の植物標本を寄贈した。

1960 年頃、厚木高校時代、近隣の高校生物部にも呼びかけ、北相自然保護の会を作り、県央・丹沢地域での自然保護活動を指導。1965 年、神奈川県自然保護協会の設立発起人の 1 人で初代常任理事。

1979 年頃より『神奈川県植物誌』のための県央地区の植物調査を開始。1988 年版、2001 年版の刊行後、調査継続のため厚木植物会を設立。調査だけでなく観察会や講演会など市民のための啓発、貴重な動植物の保全など幅広く活動した。

編著、共著に「座間市の植物」(1983)、「厚木市荻野の植物 I・II」(1995・96)、「厚木市相模川の動植物」(1998)、「神奈川県植物誌 1988・2001」(1988・2001)、「綾瀬市史別編自然」(2001) など多数。「厚木の花めぐり・神奈川県植物誌」(2006) は、地元タウンニュース紙に連載したものを再録、植物目録も掲載し、後年の地域植物環境を強く意識している。初の自費出版で、「みんなに贈呈したい」と言われた。「では出版記念パーティーを」と提案したが、はにかんで「それは困る。出版報告会なら」と言われ、植物仲間 50 数名が呼びかけに応じて参集した。この席で満面の笑顔でお祝いの言葉を受けていたのが忘れられない。

2008 年 3 月、あつぎ地域 SNS が供用されると、いち早く厚木植物会コミュニティを作り、会員には一般市民向けに身近な動植物情報を発信するよう指導した。2008 年 12 月に



は、実践的な活動を行っている団体として、神奈川県より平成 20 年度かながわ地球環境賞が授与された。「これで厚木植物会はみんなに認知された」とたいへんな喜びようだった。

6 月中旬頃から体調の異変を自覚、身辺整理を進めたようだ。『厚木の花めぐり・続編』をまとめることに集中し、生きがいを感じているとの FAX を受け取った。1 月 27 日、宅配便で届いた本にお礼の電話を入れると、「もう点滴のみで会話もできない」。奥さまは話された。2 日後に訃報が入った。『厚木の花めぐり・続編』はレイアウトも十分でなく、誤変換の校正漏れも多い。病床で自由が利かない体、そして命の時間切れと戦いながら気力のみで制作したようだ。その壮絶な有様をひしひしと感じる。

氏は俳句やダンベル体操、ソバ打ち、マクロ写真など、多方面に興味を示し行動していたが、常々、次の『神奈川県植物誌』のことを気に掛け話していた。会員には観察会や展示会よりも、植物標本を作り、調査・研究するよう勧めており、あくまで学術研究の軸足はぶれなかった。

厚木植物会はこれからも氏の思いを引き継ぎ、運営して行くつもりでいる。ここに慎んでご冥福をお祈り申しあげる。合掌

松下幸之助花の万博記念奨励賞受賞 (事務局)

この度、神奈川県植物誌調査会は、長年にわたる継続的な市民による植物相調査と『神奈川県植物誌 1988』、『神奈川県植物誌 2001』の編集、刊行に対し、第 17 回松下幸之助花の万博記念賞記念奨励賞を受賞しました。2009 年 2 月 14 日、会の代表である城川四郎代表と事務局の勝山輝男・田中徳久が、大阪市のリーガル



松下正幸理事長より賞を贈呈される城川代表ほか。

イヤルホテルで開催された贈呈式・祝賀会に出席して来ました。これを機に再度、会の結束を高め、次の植物誌へ向けての活動の励みにしたいと思います。今後とも、ご協力のほどよろしくお願いたします。

なお、今回の第 17 回松下幸之助花の万博記念賞では、東京農業大学の松尾英輔教授が記念賞を、国立科学博物館の門田裕一研究主幹が調査会と同じ奨励賞を受賞しました。



記念講演会で講演する城川代表。

事務局より

花ごよみの

会員の皆さんには、前号の FLORA KANAGAWA と一緒にお送りしましたが、『神奈川県の花ごよみ』が刊行されました。データの取りまとめや編集にご尽力された皆様、お疲れ様でした。この報告書は 1 部 500 円（送料などは別）で頒布したいと思います。ご希望の方は総会などの折にお申し出ください。

岩戸山の植物相

生命の星・地球博物館友の会の植物グループ（構成員の多くは調査会会員の方々です）では、博物館のグループ研究として、湯河原町に隣接する熱海市の岩戸山地域の植物相を調査して来ました。この度、その報告が、湘南ブロックが以前に調査した際の標本データもお借りし、博物館の研究報告にまとめられました。今号の記事に関連し、表紙でアシタカマツムシソウとオオキンミズヒキの写真を紹介しましたが、この調査時に撮影したものです。

総会のご案内

2009 年度の総会は、2009 年 4 月 25 日（土）13 時より、神奈川県立生命の星・地球博物館において開催されます。花の万博記念奨励賞の

贈呈式の様子などの紹介のほか、講演会も予定しています。ぜひご参集ください。

編集後記

1 月 29 日、諏訪哲夫氏がご逝去されました。厚木の長岡 恂氏に追悼文をお寄せいただきましたが、事務局にも『厚木の花めぐり・続編』が届いた直後のことでたいへん驚きました。これまでの会へのご協力・ご指導に感謝し、深く哀悼の意を表したいと思います。また、今号では、この悲しいお知らせとともに、花の万博記念奨励賞受賞の報告もせねばならず、編集上苦しいものになりましたこと、お許しください。次号は総会後に発行したいと思います。次の『神奈川県植物誌』に向けてのご意見・ご要望、アイデアも含め、皆さんの原稿をお待ちしております。（田中徳久）

神奈川県植物誌調査会
〒 250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000 円